

子どもが生き生きと生活する小学校特殊学級

- 特殊学級実態調査のまとめと実践研究 -

特殊教育部

要 約

本研究は、県内の小学校特殊学級担任を対象とした特殊学級実態調査や、実践協力者の実践を通して、「子どもが生き生きと生活する特殊学級」の在り方について明らかにしようとしたものである。

特殊学級実態調査からは、特殊学級の生活づくり^(資料1)における、特殊学級担任の悩みや課題を把握することができた。また、特殊学級実態調査の考察や実践協力者の実践から、「子どもが生き生きと生活する小学校特殊学級」を実現していくためには、「その子の実態に即した個別の指導計画の作成とその見返しをしていくこと」「特殊学級の活動を発信し、その子の生活づくりにかかわる人たちと連携していくこと」「その子が意欲的に取り組む生活づくりをしていくこと」が重要であり、これらがお互いに関係し合っていることが分かった。

(キーワード) 個別の指導計画 生活づくり 発信 連携 校内体制

1 テーマ設定の理由

昭和26年、小諸市立野岸小学校に知的障害特殊学級(以下「知障学級」)が、昭和50年には松本市立田川小学校に情緒障害特殊学級(以下「情障学級」)が開設された。その後、知障学級・情障学級共に増え続け、平成13年には小・中学校合わせて、知障学級が約440学級(在籍児童生徒数、約1300名)、情障学級は約250学級(在籍児童生徒数、約740名)が設置され、以前より特殊学級の整備充実が図られてきている。⁽¹⁾

このような中、これからの特殊教育の在り方として、これまでの障害の種類、程度に応じた教育から、一人一人の教育的ニーズを把握し必要な支援を行うという特別支援教育の方向が打ち出された。⁽²⁾

また、平成14年度から実施される小学校学習指導要領では、「障害のある児童などの指導」についての記述が初めて盛り込まれ⁽³⁾、その解説では、

- ・特殊学級を適切に運営していくためには、すべての教員の理解と協力が必要であること。
- ・このため、教師間の連携に努める必要があるこ

と。

と記されている。⁽⁴⁾

つまり、これからの特殊教育では、特殊学級の教育の充実に加え、通常学級での特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応、全校体制の中での適切な特殊学級の運営等が重要とされている。

こうした状況を踏まえ、特殊学級担任には、特殊教育についての幅広い専門性、指導内容や指導方法の工夫改善等が求められてくるであろう。

しかし、当センターの特殊教育研修講座の受講者からは、「子どもたちとどのようにかかわっていけばよいか」「それぞれ障害の異なる子どもたちにどんな学習を考えていったらよいか」などというような、特殊学級の生活づくりについての様々な悩みや課題の声が寄せられている。

そこで、小学校特殊学級担任を対象に特殊学級実態調査を実施し、特殊学級担任のもつ悩みや課題の実態を探るとともに、その悩みや課題の解決のために、実践協力者の協力を得て、「子どもたちが生き生きと生活する小学校特殊学級」の在り方を明らかにしようとした。

2 研究内容

(1) 特殊学級実態調査（アンケート調査）

実態調査の方法と回収率

調査対象

県内の小学校知障学級・情障学級429学級のうち100学級（知障学級68学級，情障学級32学級）の特殊学級担任を対象に無作為抽出した。

調査方法 質問紙法

調査項目 表1の20項目。

表1 特殊学級実態調査の調査項目

1	個別の指導計画の作成ができていない。
2	個別の指導計画は作っているが、授業や指導に生かせていない。
3	子どものよりよい生活づくりのための週日課表を組みにくい。
4	子どもの言動についての理解や対応で戸惑うことがある。
5	在籍する子どもの障害が重度化・多様化して指導に困っていることがありましたらお書きください。
6	生活単元学習について、悩みや課題がある。
7	教科学習について、悩みや課題がある。
8	原学級担任との連携について、悩みや課題がある。
9	他の特殊学級担任との連携について、悩みや課題がある。
10	保護者との連携について、悩みや課題がある。
11	特殊学級の児童への支援や運営等について、他の職員の理解がなかなか得られないことがある。
12	特殊学級の実践について、全校に伝えたり広げたりすることができない。
13	どのように交流教育を進めたらよいか分からない。
14	軽度発達障害の児童が入級している。
15	軽度発達障害の児童への対応に困っている。
16	軽度発達障害の児童が通級している（情障学級）。
17	軽度発達障害について、もっと研修する必要がある。
18	軽度発達障害の児童が通常学級にいて、相談を受けたことがある。
19	「特殊学級担任者会」の名称や活動内容をお書きください。
20	特殊学級担任として困っていること、悩んでいることをお書きください。

回収率

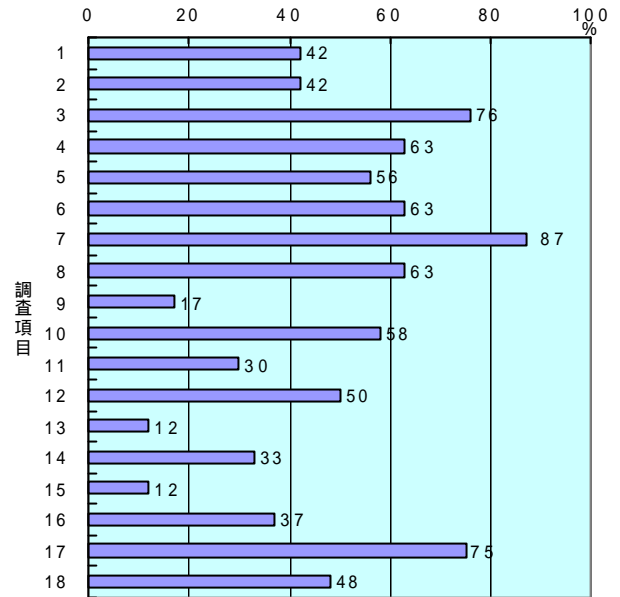
84人（知障学級56人，情障学級28人）から回答があり，回収率は84%であった。

実態調査の結果

- ・特殊学級担任が悩みや課題と感じた調査項目（1～18）にチェックを付けた人数の，全体に占める割合は，図1のとおりとなっ

た。

- ・項目19については，44頁の資料3のとおり。
- ・項目20については，37頁の ， に記した。



（注）図中の調査項目番号は，表1に対応する。

図1 各項目における特殊学級担任が悩みや課題と感じている割合（%）

(2) 特殊学級担任の悩みや課題の考察

図1より，特殊学級担任の悩みや課題を以下のからにまとめ，悩みや課題の理由について各項目ごとに調査した結果を図示し，考察した。

個別の指導計画についての悩みや課題

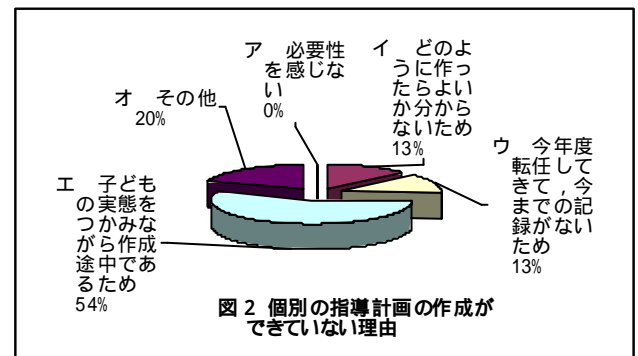


図2 個別の指導計画の作成ができていない理由

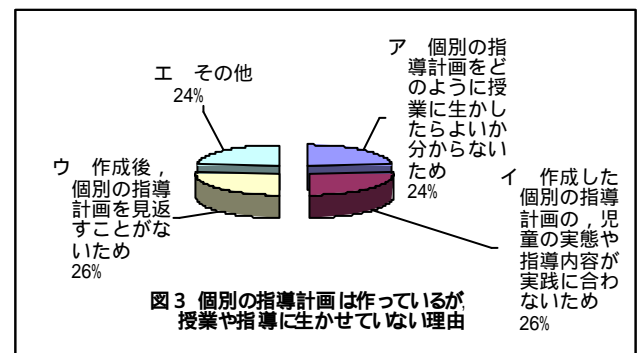


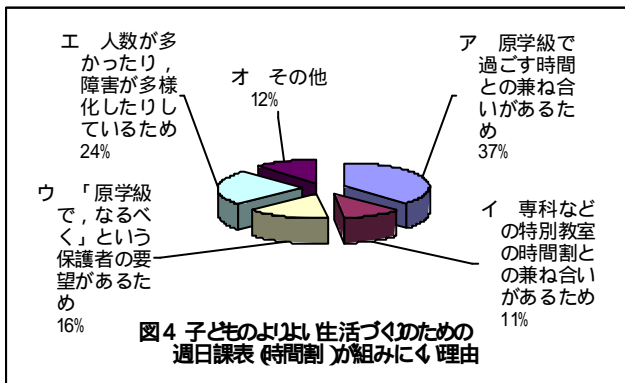
図3 個別の指導計画は作っているが授業や指導に生かせていない理由

個別の指導計画の作成と授業での活用について、悩みを抱えている担任が多い。

個別の指導計画の作成に当たっては、保護者や職員から情報を得ながら、子どもの日常の姿や生育歴、心理検査等、幅広い視点で、その子の実態を把握することが大切である。それには、特殊学級担任が、子どもの思いやニーズなどを把握する力をもっていることが求められる。日々の実践を評価し、個別の指導計画の見返しを積み重ねる中で、子どもの内面まで深く理解する教師の感性を磨くことが望まれる。

個別の指導計画の授業への活用という視点からは、可能性の芽^(資料2)から教育課題を立て、指導内容を選択・組織し、一人一人に合った具体的な支援を導き出すことが必要である。また、個別の指導計画を見返す中で、その子に合ったよりの確な指導内容や支援を導き出していくことが必要であろう。

日課の作成についての悩みや課題



原学級で過ごす時間や特別教室使用時間割などの兼ね合いから、一人一人の子どもの実態やニーズに合った時間割が組みにくいという悩みがある。

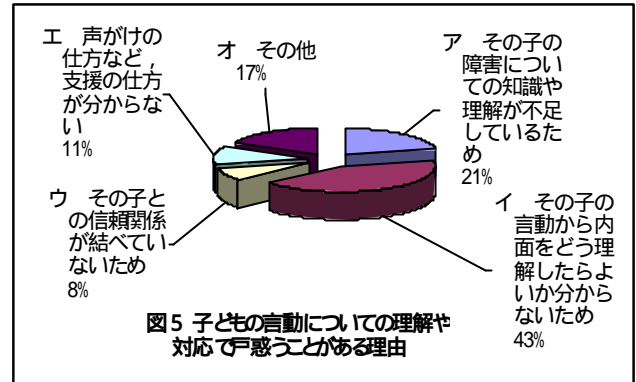
この問題は、障害が多様化し個別の対応に追われることで、更に困難さを増していると考えられる。

一人一人の子どもが生き生きと生活できる日課の作成に当たっては、原学級担任や保護者と十分に話し合い、子どもの実態やニーズを共通理解した上で、原学級での学習の内容を決めることが大切である。

また、職員間の理解を深める中で、特殊学級の

日課も考慮した特別教室使用時間割の編成を行うことが必要であろう。

児童の理解と支援についての悩みや課題



子どもの言動についての理解や対応の戸惑いは、その子の内面や障害をどう理解するかという問題であると考えられる。

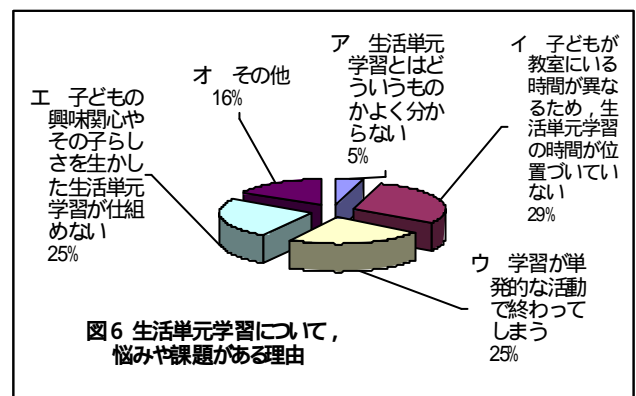
その子の内面をどう理解したらよいか分からないという悩みの背景には、

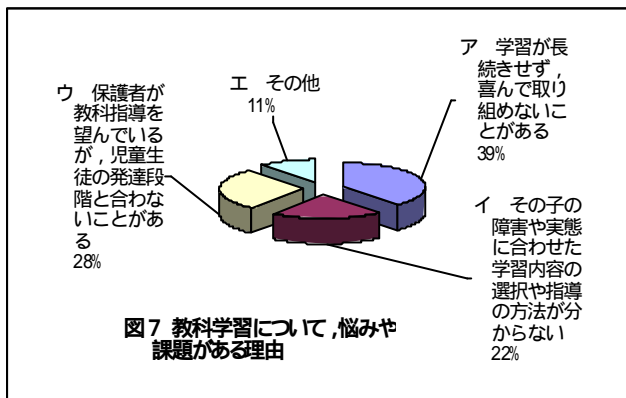
- ・ 障害が多様化し、様々な状態を示す子どもが入級してきている。
- ・ 特殊教育経験が少ないことから、子どもの行動を理解することに困難を感じている。
- ・ 障害そのものについて、理解の途上にある。
- ・ 障害にとらわれることによって、子どものありのままの姿が見えなくなる。

といったことが考えられる。

これらについては、個別の指導計画を作成し、検討を重ね、見返しをする中で、その子に対する理解が深まり、よりその子に応じた支援ができるようになると思われる。

児童が意欲的に取り組む学習についての悩みや課題



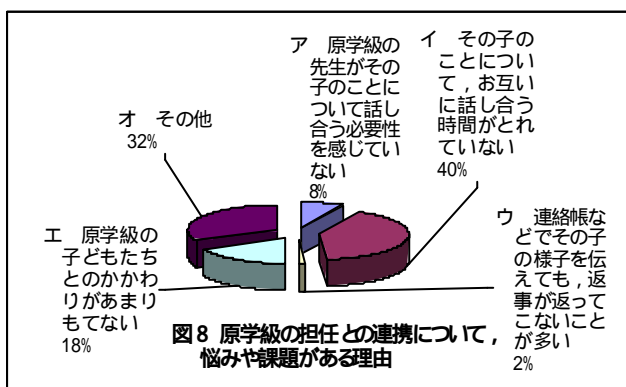


生活単元学習，教科学習に意欲的に取り組めるようにするには，前述の個別の指導計画の項に挙げたような，その子の理解と同時に，教科・領域・自立活動等，特殊教育における教育課程の特徴を理解する必要がある。「教科学習」では，単に教科書の内容を薄めたような展開をしていたり，繰り返すことによるのみ学習内容の定着を図ろうとしていたりすることがある。

また，「生活単元学習」とはどのようなものなのかについての理解に困難を感じている担任も多い。

これらの学習を進めるに当たっては，子どもの認知や発達に関する理解を深めることで効果的な支援ができると思われる。

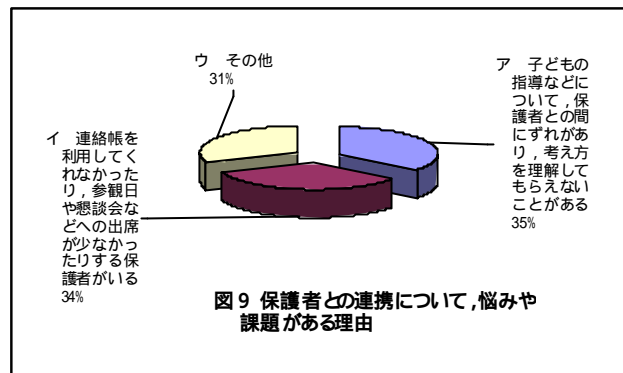
原学級担任との連携についての悩みや課題



原学級担任と情報交換をする場やその時間を確保する困難さが伝わってくる。これは，原学級担任の意識のもち方にも関係していると考えられる。

今後，職員会等で特殊学級の児童の様子を伝えるなどして，全校職員の意識を啓発していく必要があると思われる。

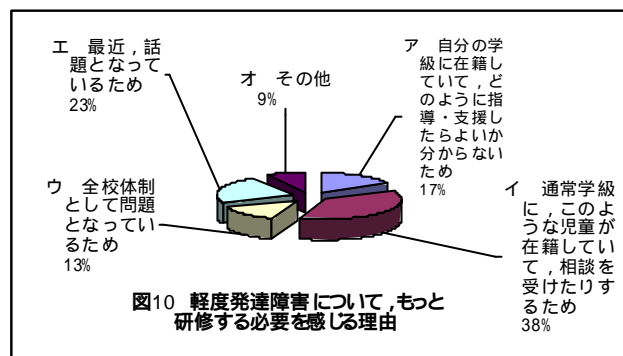
保護者との連携についての悩みや課題



保護者との間で，子どものことについて，「話し合い等のかかわりが不十分である」「話し合っても共通理解をするのは難しく，ずれがある」と感じていることが多い。

特殊学級担任も保護者も，その子の思いに心を寄せる中で，今，その子に本当につけたい力は何かを，共に考え合うような関係になっていくことが大切であろう。そのため，特殊学級担任には，保護者の思いを受け止め，受容的に接していく姿勢がより求められている。

軽度発達障害の児童への対応についての悩みや課題



各学校では，軽度発達障害児への理解と対応が，大きな課題になってきている。それに伴い，特殊学級担任は，特殊学級に在籍する児童への支援・通常学級担任からの相談・全校体制での課題解決等に対し，研修の必要性を感じている。

「一人一人の教育的ニーズに応じた特別な支援教育」が推進されようとしている今，特殊学級に在籍する児童の支援だけでなく，通常学級にいる児童の支援の相談にのったり，全校体制での支援の核になったりするなど，今後，特殊学級担任の役割が高まってくると考えられる。そういう点で，

特殊学級担任の積極的な研修が期待される。

特殊学級担任が一人であることについての悩みや課題

特殊学級の運営や子どものことについて、相談したり、話し合ったりする仲間が校内にいない。

(調査項目 20 より)

- ・同じ立場で相談する相手がいない。
- ・特殊教育について、もっと情報を得たり研修を受けたりしたい。
- ・指導要録，就学指導等，事務的なことも含めている知りたい。

特殊学級担任が校内で一人の場合が多いため、悩みや課題を相談して解決することに困難な状況がある。

こうした現状を改善していくためには、まず児童と身近にかかわれる原学級担任・専科の先生・養護教諭などとの連携を図っていくことが必要となってくるであろう。日常的な情報交換の場などを通して、共通基盤で話し合える関係をつくっていききたい。また、特殊学級の児童の様子を積極的に職員や児童等に伝え、特殊学級児童の理解を一層深めることも大事にしていきたい。

特殊教育の情報を得たり研修したりする機会としては、特殊学級担任者会などの組織の有効的活用が望まれる。

特殊学級や特殊教育の理解・啓発についての悩みや課題

全校職員・児童・保護者・地域の人たちに、特殊学級や特殊教育について理解してもらうにはどうしたらよいか。(調査項目 20 より)

- ・全校児童や保護者等の、特殊学級や障害のある児童に対する偏見に、課題や壁を感じている。
- ・障害のある児童の人権に関する職員の意識が様々であり、特殊教育の大切さを理解してもらうことが難しい。

障害のある児童や特殊学級や特殊教育に対する周りの人たちの偏見や意識の低さに、課題を感じている特殊学級担任は少なくない。そのことで、特殊学級担任や児童が孤立しがちになる状況もあるように思われる。

特殊学級や特殊教育等の理解・啓発を進めるためには、特殊学級の活動の様子や児童のよさを周りの人たちに伝えていくことを大事にしていきたい。そうしたことを積み重ねていくことで、周りの人たちの理解が深まっていくであろう。

同時に、障害のある児童や特殊教育に対する理解を深める研修の機会も、積極的に設けていきたい。

以上の悩みや課題の考察を踏まえ、「子どもが生き生きと生活する特殊学級」の実現を目指して、4人の実践協力者の実践から手だてや工夫を探ってみた。

(3) 子どもが生き生きと生活する特殊学級の実践

その子の思いに寄り添い、よさや特徴的な姿を生かした個別の指導計画を立て、見返しながら支援を重ねる(A小学校 情緒障害特殊学級)

A D H D の診断を受けているC子は、情緒的な困難さのため情障学級に入級している。生活においては、友達との間で様々なトラブルが見られるが、情障学級担任のB先生は、問題とされる言動の背景には、C子の特別な思いがあると感じた。そこで、その思いを探って支援の糸口とし、個別の指導計画にまとめて日々の支援に生かそうとした。

ア その子の言動は、その子の思いの表れととらえ、その背景を探る

B先生は、まず生育歴や諸検査等の事実を集積した。学校生活においては、どんなときに意欲的な姿が見られたのか、あるいはどんなときにトラブル等があったのかを記録するようにした。

すると、問題と思われた言動の裏には、C子の「こうなりたい」という意欲的な姿があることが分かってきた。しかし、やり方が分からないまま取り組んだり、周りの状況を考えずに行動したりしてしまうために、周囲の友達や先生には問題のある行動であると思われるのであった。

- ・鉄棒で順番を待つ友達の前に割り込み、「順番抜き」と非難され、そう言われると周りに当たり散らす。

やりたいという意欲的な姿の表れ。

- ・百点にこだわる等、結果を気にする。
- ・人前で話すとき、もじもじする。友達が発言していると「ハイハイ」と手を挙げる。
- ・友達のやることを見て行動する。

周りの友達との違い、できない自分を感じている。これには「周りと同じようでありたい」という願いや、本来の自分に自信がもてないという思いがあると思われる。だから、友達のやり方を見たり、こうすればよいという見通しがもてたりすることで、積極的にになれるのではないか。

- ・図書係としてカード配り、貸し出しや返却の仕事を進んでできた。

やることに見通しがもてたり、友達が自分の指示に従ってくれたりすることには、意欲がもてそうである。

これまでC子の保護者は、C子の言動や周りの人とのトラブルに何かとつらい思いをしながらも「無理をさせたくない」と温かく見守ってきた。B先生は保護者との間で、普段からC子の言動とその背景にある思いを重ねながら話題にし、その育ちと一緒に実感できるように努めてきた。このことで保護者は、C子の思いに触れてその理解を深めるとともに、C子を温かく理解し、自分の気持ちも丸ごと受け止めてくれるB先生に信頼を寄せていった。

こうして、B先生と保護者は、C子の思いを第一に考え、C子が生き生きと生活できるようにするにはどう支援したらよいかを共に考え合うようになっていった。

イ 導き出した可能性の芽から、支援の方向や具体的な手だてを考える

B先生は、保護者と相談しながら個別の指導計画を、次のようにまとめていった。

見通しをもって取り組めるようにするために

- ・興味関心のある活動を据える。

- ・できる状況を整える。

(やり方が分かる、意欲的に取り組めるもの：視覚情報、活動の区切り等の支援)

- ・モデルとなる人が近くにいること。

やればできるという実感がもてるようにするために

- ・できたことがすぐ分かるような工夫をする。

(その場での具体的な賞賛、視点が明確な自己評価カード等の支援)

ウ 教科・領域からその子の指導内容を選び出し、それらを組織して日々の日課に位置づけ支援する

B先生は、C子に寄せて以下のように教科・領域から指導内容を選択・組織し、支援につなげた。

【国語的な活動における指導内容】(抜粋)

(朝の会・委員会・国語等において)

- ・当番の決まった言葉や繰り返しがある調子のよい言葉・動作等で、みんなに発表する。

参観日に、詩の発表会をすることになった。まず、B先生は、子どもたちが大好きな「のはらうた」の詩集を採り上げ、その中から、C子が自分で好きな詩を選ぶようにした。また、詩の中に繰り返し出てくる「ツン タタ ツン タ」などの言葉を、友達とペアになって担当するようしたり、もじもじして言葉が言えなくても発表できた気持ちももてるように、打楽器を鳴らしながら言うようにしたりして、できる状況を整えていった。

練習では、B先生が隣で声の大きさや読み方などを具体的に認めて励ますと、最後まで一緒に取り組むことができた。発表会ではペアの子と一緒に打楽器を鳴らしながら「ツン タタ ツン タ」等を調子よく何回も言って発表することができた。C子は、言えた喜びと周りの子や保護者の賞賛に、輝くような笑顔を見せて成就感を味わっていた。C子の保護者も「今が一番幸せなとき」と連絡帳で伝え、成長の手応えを実感して喜んでいる。

進級したC子は、自ら挙手して教科書をはっきりと一人で音読し、周りの子どもたちをびっくりさせた。できた自信が、更に次への意欲となってきている。B先生は新たな指導内容を設定して支援をしている。

軽度発達障害のある子どもたちに対しては、結果としての問題行動に目を奪われたり、障害によるものと決めつけてしまったりして適切な支援がなされないことがある。しかし、トラブルの裏にある思いを理解しようと努め、一人の人間として向き合い寄り添ったときに、その子の思いが見えてくる。そして、そのよさを生かして支援をすると、その子が生き生きと活動する姿を目にすることになる。

このように、個別の指導計画は、その子が学校生活を生き生きと過ごせるようにしていく土台となるものである。

輝く姿や育ちを発信する

(D小学校 知的障害特殊学級)

D小学校特殊学級の子どもたちは、集団が苦手だったりできないことへの苦手意識が強かったりして、教室に閉じこもりがちだが、職員とは安心してかかわる姿も見られた。一方、通常学級の子どもたちや保護者の中には、特殊学級を特別視する人もいるなど、特殊学級に進んでかかわろうとする意識が十分とはいえなかった。

周りの人の理解と共感が高まる中で、子どもたちの生き生きとした姿がはぐくまれていった過程を見てみる。

ア 特殊学級の子どもの願いを生かした成就感がもてそうな活動で、周りの子どもたちも興味もてそうな活動を位置づける

特殊学級担任のE先生は、学級の子どもたちが自信をもち、生き生きと生活するようになるには、周りの人とのかかわりの中で成就感が積み重なっていくことが大切であると考えた。それには周りの人の理解・共感を得ていることが前提となる。そのため、子どもたちの輝く姿や主体的な姿が周囲の人に伝わっていくことが大事であると考えた。

「先生レストラン」の活動で収入を得た子どもたちは、『犬を飼いたい』という願いをもった。そこで、E先生は、特殊学級の子どもも周

りの子どもたちも興味関心がもて、学級の子どもたちの意欲的な姿が望めそうな活動として、犬を飼うことを据えた。

子どもたちは、新聞の「譲ります」欄から、子犬のハナを見つけ、もらい受けた。間もなく学級には、学校中の子どもたちが押し寄せるようになった。遊びに来たある子の乱暴なかかわり方に心を痛めたF男は「何とかして」とE先生に訴えて来た。初めて特殊学級の子どもたち以外に働きかけた姿であった。E先生は、学校放送や集会でハナと遊ぶときのルールを呼び掛けるなどの活動を支え、F男の願いがかなうように支援をしていった。

特殊学級に入級している不登校気味のG男は、朝早く登校して、ハナと散歩に出るようになり、登校して来る子どもたちや地域の人と自然にあいさつするようになった。

また、近所の人々がテラスにいるハナに目をとめては、「お利口だね」などと褒めてくれるようになった。特殊学級の子どもたちも、ハナの「お座り」や「お手」などを自慢げに披露するなどして、対応するようになった。

このように、ハナを介して周りの人が特殊学級の子どもを温かく見守るようになっていった。

イ 周りの人に特殊学級の子どもたちの輝く姿が伝わるように、学校生活のいろいろな場で活動を位置づける

「えさ代を自分たちで稼ぎたい」という願いをもった子どもたちは、ペーパーウエイトを作ったり、銀杏を拾ったりして販売した。また、代金を管理する郵便局の口座を作る、公共交通機関を利用して買い出しに出かけるなど、ハナを通して生活の幅を広げていった。

翌年、E先生は、ハナが大好きな子どもたちが集まって特殊学級の子どもと日常的に楽しく活動ができないか、それが発展して一緒に音楽会の発表ができないかと考えた。

そこで、学校中に希望を募ると、大勢の子どもたちが集まり、ハナを介して交流するグループ「ハナちゃんズ」が結成された。休み時間に

は、特殊学級の子どもたちが得意とするゲームを楽しく行うなど、親しさが増していった。その後、音楽会に向けて、楽しく練習を重ねる中でお互いを認め合うようになっていった。音楽会当日は、特殊学級の子どもも一緒に生き生きと演奏する姿が会場に感動を与えた。終了後、通常学級の保護者からは「会場が一つになり、温かい気持ちになりました」などと感動を伝える言葉が多く寄せられた。

学級の子どもたちは、ハナを介して多くの人とかかわる中で、「やればできる」という自信をもつようになり、そのことは自分たちから働きかけようとする力を付けることにもなった。同時に、こうした活動から生まれた周りの人たちとのかかわりは、自然な発信となっていった。

周りの子どもたちも、特殊学級の子どもたちと日常的にかかわるだけでなく、楽しい音楽会ステージにしたいという願いをもって、特殊学級の子どもたちと練習を重ねることで、相手を理解し、思いやる心を高めていった。保護者を含む地域の方々も子どもたちの輝きを実感し、応援し始めている。

生き生きと生活する子どもの育ちを願う特殊学級を運営するためには、周りの人の協力を必要とする場面が多く出てくる。これには普段から特殊学級の教育についての理解と共感を得ていることが前提になってくる。そのため、特殊学級担任は、周りの人が特殊学級の子どもの生き生きとした姿や育ちが実感できるように留意して、指導計画を立て、実践していく必要がある。

しかし、学校や地域の実情には違いがある。従って、子どもが生き生きと生活する特殊学級の実現に見通しをもちつつ、実情を踏まえ、できるところから実践する中で、根気強く特殊学級の子どもの輝きや育ちを伝える発信をしていくことが大切である。この繰り返しにより、周りの人も特殊学級の子どもに理解を示し、共感するようになっていく。こうしたことの積み重ねにより、協力・連携が可能になってくる。

校内発信から校内理解そして校内連携へと広げ
る中で、特殊学級を支援する体制作り

(H小学校 知的障害特殊学級)

知障学級担任となったI先生は、学年も様々で、実態やニーズが異なっている子どもたちに応じた、日課や生活づくりに悩んでいた。「何とか、一人一人の子どもが生き生きと生活できる場を用意したい」と思ったI先生は、まず、子どもたちを共通に理解し支援をしていく職員間の連携が大切と考え、地道に実践を積んできた。

ア 特殊学級担任が積極的に校内発信し、一人一人の子どもへの支援の基盤を作る

(7) 年度当初の職員会で、特別な支援の大切さを伝える

年度当初、職員会の「心に留めておきたい児童」を共通理解する場で、特殊学級に在籍する子どもたちの実態・教育課題・指導の方向などを、個別の指導計画を基に丁寧に伝えた。その中で、「特殊学級の子どもたちは、全職員の協力した支援体制の中で育つこと」を伝えた。

(1) 原学級担任や専科の先生等との連絡・調整を密にする

a 「原学級担任者会」を設置し、定期的な情報交換の機会を用意する

特殊学級と原学級担任が、その時期の学級児童の実態や運営・支援の方向について共通理解を図るために、「原学級担任者会」を設置し、定期的な情報交換の場を用意した。また、必要に応じ、クラブや委員会を担当する先生とも、参加の状況やその子の教育課題に沿った支援について情報交換するように努めた。

特殊学級に在籍するJ男は、希望して給食委員になった。給食委員の仕事には、身支度検査や昼の放送での献立紹介・給食室の整頓等、多くの活動がある。J男は仲間と一緒に喜んで活動を始めた。

しかし、放送による献立発表は、平仮名の拾い読み段階のJ男にとって、幾つかの壁を乗り越えなければならぬものであった。

早速、I先生は栄養士の先生にも相談し、「男の実態や願い・不安について、原学級担任や関係する先生方に伝え、献立の放送ができる支援について考え合った。」男の気持ちに寄り添いながら、彼の願いを実現するために、「栄養士の先生が、早めに」男の発表原稿を作成する」「特殊学級担任は、その原稿を単語ごとに分けた平仮名文に表し、事前に練習を積めるようにする」「原学級担任は、学級のみんなの前で、「男の頑張りの様子を伝え、認め合う」等のできるようになるための支援を決めることができた。また、認められることで、新しい活動にも自信をもって取り組める実態から、校長先生をはじめ他の先生方からも認められるように働き掛けた。

いよいよ本番。「男」は緊張しながらも、見事に自分の力で放送をすることができた。大役を果たした「男」は、多くの先生や友達から賞賛され、大満足の笑顔を見せていた。

b 休み時間や放課後を利用し、日常的に情報交換をする

連絡ノートや定期的な話し合いの場を通して情報交換することは、特殊学級や原学級などの活動の様子を理解することに有効である。しかし、十分な時間を確保することができないことも少なくない。

そこで、休み時間や放課後に特殊学級の活動の様子を伝えたり、原学級での様子を聞いたりするようにした。短時間ではあるが、活動を終えたばかりであるため、情報は具体的で新鮮なものとなり、次の指導に生かせる大事なヒントを得ることができた。

イ 特殊学級の子どもの活動を考慮した、特別教室使用時間割を編成する

特殊学級への特別な支援の必要性が共通理解される中で、特別教室使用時間割を編成する際の配慮点が明らかになり、全校職員の協力を得ることができた。そのため、交流活動や原学級での学習、特殊学級独自の時間や個別学習の時間を考慮した特別教室使用時間割が編成され、特殊学級の子どもの実態に合った日課表を作る

ことが可能となった。

更に、I先生の場合は時間割編成係に加わったため、特殊学級の実態が伝えやすく、協力体制が整う中で日課表作りを進めていくことができた。

的確な個別の指導計画に基づいて、子どもの実態やニーズ、担任の願いや悩みをこまめに職員に伝えたり、情報交換をする場を意図的に設けたりすること（校内発信）は、全職員の共通理解を図り、特殊学級の支援体制を整える基本となる。

特に、子どもたちが直接かかわる機会が多い原学級担任や専科の先生、クラブや委員会担当等の理解と協力を得ることは大切である。多くの職員の理解と協力が得られると、子どもたちの様々な活動の場で一貫した手厚い支援がなされ、その子により合った生活づくりへとつながる。

これらのことを実現するには、普段から職員同士が話しやすい雰囲気を作りながら、特殊学級への支援体制を地道に作り上げていく担任の姿勢が必要であろう。

また、一人一人が生き生きと生活できる日課表を作成するためには、特別教室使用時間割を作成する際、専科の先生やその他の活動を担当する先生方の立場や意見を理解した上で、特殊学級担任が様々な要望を伝えたり、理解を得てもらったりすることが必要になる。I先生の場合、特別教室時間割作成係に加わった。このように新年度準備における校務分掌の中に、特殊学級担任を位置づけることで、学校全体としてスムーズな運営が図られるであろう。

校内の「配慮が必要な子ども」支援の調整役をする（K小学校 情緒障害特殊学級）

通常学級には、情緒面で配慮が必要な子どもがいることも多い。また、情障学級にいる子どもが状態によって通常の学級に戻ることもある。そのため特殊学級担任は、通常学級にいる「配慮が必要な子ども」をどう理解して支援するかについて、通常学級担任から相談を受けることが多くなって

いる。

こうした中、情障学級担任は学校全体を視野に置き、通常学級担任のニーズに応えたり、学校としてできる支援を考えていくための調整役をしたりすることが求められてくる。その様子をK小学校の事例を通して述べる。

入学してしばらくたち、通常学級1年生のL子は、授業中に教室を出て校内を歩き回ったり、ほかの教室に入って教師の話に割り込んだりするようになって、対応に困ることができた。

ア 日頃から校内の「配慮を要する子ども」を気に掛け、状況により適切なかかわりを始める

通常学級担任は、L子に個別指導を行っていたが、L子の行動はエスカレートしていくばかりだった。K小学校には教育相談部があり定期的に教育相談ができる体制にあったが、情障学級担任のM先生は、できるだけ早く対応する必要性を感じた。そこで、5月の会議を待たず、学級担任に声を掛けた。

イ 校内就学指導委員会、職員会に諮るように連絡、調整をする。

学級担任との話し合いを続ける中で、ある時期から、L子の支援に関しては、校内全職員の協力が必要であることが分かってきた。K小学校では校内就学指導委員会に、判定や指導だけでなく、相談機関としての機能をもたせるようにしていた。M先生は、通常学級担任だけでなく、学年主任・専科の先生とも連絡・調整の上、通常学級担任が職員会にL子の件を諮れるようにした。また、臨時的校内就学指導委員会も開かれた。

L子については、それぞれの教師が、「何とかしてあげたい」と思っていたこともあり、「L子は教室から出て行ってしまうことが多く、行動がつかめないでいる。どんな様子が見て教えてほしい」と学級担任が呼び掛けると、多くの情報が寄せられた。また、M先生は学級担任との連絡会を位置づけて、学級担任から保護者へ

学校での様子を知らせ、家庭との連携を密にできるようにもした。

ウ 通常学級担任と共に保護者の気持ちを受け止め、支える

L子の学校生活の様子について保護者が心配していたので、話し合いをもつことにした。話し合いには、校内就学指導委員会での協議を基に、情障学級のM先生が加わった。M先生が経験も交えながら、10年後、20年後を見通して、今大切にしたい可能性や伸びているところについて伝えながら相談をする中で、保護者の不安は軽くなっていった。

エ 専門性を生かした子ども理解と、支援の見通しを伝えていく

M先生と通常学級担任は、校内の先生、家庭等から多くの情報を得ながら、L子の思いを受け止めた支援の方向を決め出した。特に、M先生は諸検査を活用したり、L子が伸びようとしている「可能性の芽」等、「個別の指導計画」の資料を作成したりして、それを校内就学指導委員会にも適宜提出し、理解と支援の一助とした。

また、校内の共通理解の上、一定期間、試験的に情障学級でも活動できるようにした。更に、M先生が家庭との連絡を取り合うようにしたり、スクールカウンセラーとの連絡・調整をしたりしていった。

現在、L子は授業中の出歩きもなくなり、生き生きと学校生活を送っている。

「情緒障害」という障害の特性上、子どもは通常学級と情障学級を行き来することも考えられる。また、通常学級にいる「特別な配慮の必要な子ども」への支援を考えたとき、情障学級担任の守備範囲は広いといえる。この点で、情障学級担任は、子どもと学級担任を支えるために、校内体制を機能させていく役割を担っていくことが重要になってくる。

(4) 「子どもが生き生きと生活する特殊学級」を実現していくための構成図

以上の4人の実践協力者の実践から、見えてきたことは、次のとおりである。

実践 のA小学校B先生の実践から

子どもが生き生きと生活するようになるには、保護者と共にその子の思いに寄り添い、よさや特徴的な姿を生かした個別の指導計画を立て、見返しながら支援をすることが大切である。

実践 のD小学校E先生の実践から

子どもたちが自信をもち、生き生きと生活できるようになるためには、特殊学級の子どもたちの輝く姿や育ちを、学校生活のいろいろな場で、積極的に発信していくことが大切である。発信に際しては、子どもの願いを生かした成就感がもてそうな活動を位置づけることが必要である。

実践 のH小学校I先生の実践から

子どもたちの実態に応じた日課や生活づくりをしていくためには、子どもたちを共通に理解し、支援をしていく職員間の連携が大切である。そのためには、その子の実態に即した個別の指導計画を基に子どもの実態やニーズ、担任の願いや悩みをこまめに伝えたり、情報交換の場を意図的に設けたりする校内発信が重要である。

実践 のK小学校M先生の実践から

通常学級にいる「配慮が必要な子ども」を支援していくためには、特殊学級担任が側面から助言をするなど、その子を支援するための校内体制づくりの一翼を担っていくことが大切である。そのことで、特殊学級担任は、校内になくてはならない存在となり、通常学級担任は特殊学級担任の姿に学び、配慮を要する子や特殊学級の子どもたちに関心を寄せていくことになる。

以上から、「子どもが生き生きと生活する特殊学級」の実現について、図11のようにまとめた。

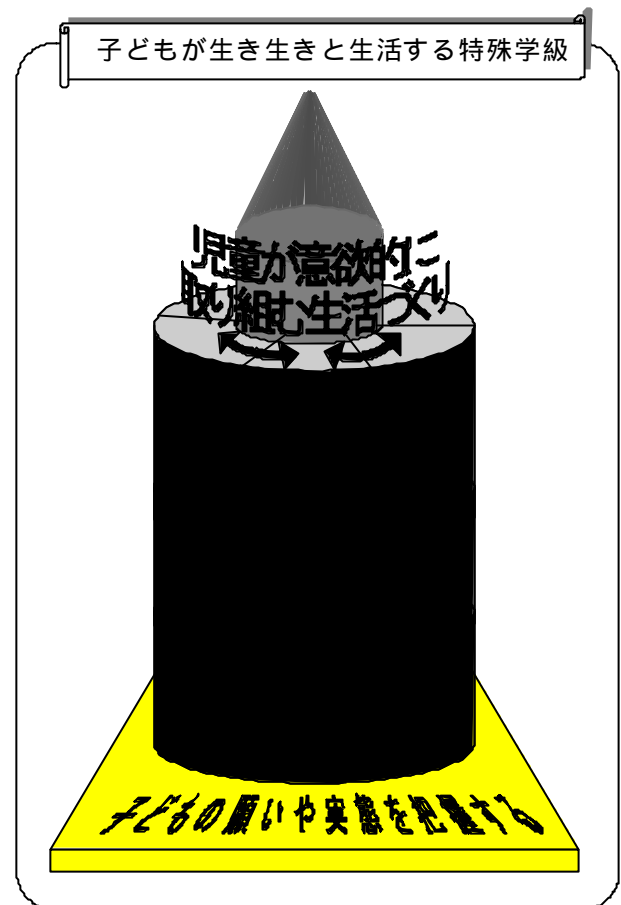


図11 「子どもが生き生きと生活する特殊学級」を実現していくための構成図

3 研究の成果と課題

特殊学級実態調査により、特殊学級担任がどんな悩みや課題をもっているのか把握することができた。

特殊学級実態調査の考察、実践協力者の実践をとおして「子どもが生き生きと生活する特殊学級」を実現していくための構成図を図11のようにまとめることができた。この構成図は、悩みや課題をもつ特殊学級担任にとって、悩みや課題がどこに位置づくのかを知り、「子どもが生き生きと生活する特殊学級」の実現に向けて、具体的に実践していくための一助になることを期待している。

「子どもが生き生きと生活する特殊学級」を実現していくために、特殊学級担任が果たす具体的な役割について、更に明らかにしていきたい。

資料1 「生活づくり」について

「自立する力」を育てるという目標に視点を据え、日々の児童生徒の生活経験や興味、欲求、願い等を基に、児童生徒自らが目当てをもって、喜々として活躍できるように、学校生活を組織すること。

長野県教育委員会「自立する力を育てる計画と指導 特殊教育初任者研修資料P2」(平成12年4月)より

資料2 「可能性の芽」の把握について

- ・生育歴等や日常生活の姿にあるその子の行動の意味や思いを理解して、これから伸ばしていきたいことを記入する。
- ・そのために、主体的な行動や自分から取り組む姿、自ら活動を変化させる姿、興味・関心等を分析し、よりよく生きたいとするその子のよさを把握して記入する。
- ・その子の可能性については、「今このような条件の下で、ここまでできるようになっている」というとらえ方をしていく。その条件をどの程度広げたり緩めたりできそうなのかという点で、教育課題や指導の方向につなげていくことができる。
- ・多くの教師の目を通して把握すること、更に修正を重ねることが大切になる。

長野県教育委員会「特殊教育教育課程学習指導手引き書 - 基本方針 - P138, 139」(平成14年1月)より

資料3 郡市の特殊学級担任者会の主な活動内容例(一部地域抜粋)

A 郡市特担会	総会(子どもの実態、運営、実践事例)、通信	A市a地区特担会 A市b地区特担会	養護学校の担当者も一緒に研修会(実態や悩みなど)、交流会、LD・ADHDの研修会、授業参観 意見交換(年間指導計画、学級経営案、個の教育課題資料もち寄り、校内就指)特殊学級交流会、講演会(養護学校長)
B 郡特担会	授業参観、文化祭、WISC- 研修会、講演会、合同学習会		
C 市特担会	相談室と懇談(就指)、合同作品展、ADHD関連研修会、養護学校訪問、担任者記録集、和太鼓学習、知的障害者更生施設訪問、そり、スケート教室		
D 郡市特担会	研修会、合同作品展、講演会、作業所見学、交流会、遠足、太鼓交流会、カレンダー作り、宿泊学習		
E 郡市特担会	懇談会(実践と悩み) 施設見学(障害者職業センター)	E 郡c 町特担会	打ち合わせ会、反省会
F 市特担会	校長会と連絡協議会、合同作品展、養護学校・療育センター見学、研修会(ソーシャルスキル)	F 市d 地区特担会 F 市e 地区特担会 F 市f 地区特担会	合同遠足、文集作り、合同作品展分担・運営・活動 授業研究会、合同遠足 交流合宿
G 郡担任者会	施設見学 合同作品展	G 郡g 地区特担会 G 郡h 地区特担会	授業参観、話し合い(困難点や悩み)、教材研究・実技講習会、文集作り 実技講習会、宿泊キャンプ、知的障害者更生施設見学
H 郡市特担会	知的障害者更生施設訪問、合同作品展、文集作成		
I 郡市特担会	K-ABC・WISC- リトミック講習会、知的障害者更生施設見学会		
J 郡市特担会	共同作業所見学、交流会、講演会(医師)	J 郡市i 地区特担会 J 郡市隣接村特担会	共同作業所の見学、交流会 月1度の学年会、交流会
K 郡市特担会	総会、講演会、技術講習会(版画)、合同児童作品展、会報、文集作成	K 郡市j 地区特担会 K 郡市k 地区特担会	養護学校交流会、交歓遠足 カレー作り交流会、研修会、教材作り講習会(トイレットペーパーホルダー)

県内の多くの郡市で、特殊学級担任者会が組織されている。

更に、身近な学校同士で、合同の特殊学級の行事や困難点の出し合い等、支え合う活動が行われている。

〔実践協力者〕 五味 智子、竹内 則王、三澤 美智代、山下 亨

〔参考文献・引用文献〕

- (1) 長野県教育委員会「特殊教育教育課程学習指導手引き書 - 基本方針 - 」(平成14年1月)
- (2) 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議「21世紀の特殊教育の在り方について(最終報告)」(平成13年1月)
- (3) 「文部省告示・小学校学習指導要領」(平成10年12月)
- (4) 文部省「小学校学習指導要領解説・総則編」(平成11年5月)

〔研究担当者〕 植木 行雄、金井 充江、望月 弘、江守 央至、勝山 幸則

